

制服と快適な学校生活

3年4組14番 北山 陽菜

1. はじめに

この論文のテーマは「快適な学生生活と制服」であり、健康面からみた制服問題について論じる。

このテーマを選んだ動機は、自身の経験からである。私は幼少期からアトピー性皮膚炎を患っており、衣服は肌に優しい天然素材で作られたものを選ぶようにしていた。中学校までは私服登校だったこともあり自由に服を選ぶことが出来ていたが、高校に入学してからは制服を着ないといけなくなった。私の高校の制服は綿とポリエステルを組み合わせで作られている為、自分にとっては着心地が悪いものだった。そして、学校に登校する日は必ず制服を着ないといけなかった為、以前よりも肌荒れに悩むことが増えた。また、友達やクラスメイトとの会話の中で同じ悩みを持っている子が私以外にもいることに気づき、何故、学生制服は肌が弱い生徒に配慮されていないのかに対して問題意識を持つようになった。

以上が、私がこのテーマを研究しようと思った動機である。

2. 序論

この論文の目標は、プレゼンテーションを行い論文を書くことで、健康面から見た制服問題について興味や関心を持ってもらい、全ての生徒が快適な学生生活を送ることができるようにすることだ。そこで私は、「制服と私服を選択制にできないか」という問いを立てた。そうすれば、全ての生徒が快適に学校生活を送ることができると考えたからだ。そうすれば、制服を着たい生徒は制服を着れば良いし、体調がすぐれなかったり着るのが苦しいと感じる生徒は私服を着れば良い。制服を着たい派と着たくない派のどちらにも対応できると考える。

この問いを立てた後、2022年6月の探究週間で一二年生に向けて発表を行い、セッションを行なった。その内容は、『制服と私服を選択制にしたときのデメリットは何か』だ。そこで出た意見として、「学校のイメージが悪くなる・毎日私服を考えるのがめんどくさい・早退して遊びに行ける・いじめが起きる・統一性がなくなる」などが挙げられた。このセッションでこれだけのデメリットが挙げられたが、全国の学校を調べてみると制服と私服を選択制にしている学校や完全私服制の学校が存在していることがわかった。

そこで生まれた問いが、「それらの学校は何故選択制や私服制にすることができるのか」ということだ。この問いに対して、「生徒の自主性を重視しているから」という仮説を立て、オンラインの情報や書籍、調査、論文から、制服の歴史と日本の時代背景を照らし合わせて探究を行う。

3. 本論

まず初めに、全国に私服登校が可能な学校はどれくらいあるのかについて調べた。小林哲夫さんの『制服とは何か』という著書によると、全国の26府県の全ての県立高校では制服が制定されている。その他の21府県の私服登校率を調査していると、その数値が他県に比べて異様に高い県を発見した。それが長野県だ。長野県の私服登校率は50%でその次に高かった

のが宮城県の26%だ。このことからわかるように、長野県は私服登校率が非常に高く県立高校の半分が私服登校であった。何故長野県ではこれほどまでに私服登校率が高いのか。

長野県にある私服登校の高校はどの時期から私服登校制になったのかを調べていたところ、ほとんどの学校が共通の時期に私服化を行っていたことがわかった。それが、1970年代前後だ。この頃の日本では、学生が主体となってデモやストライキ、バリケードによる建物占拠をし、学生生活や政治に対して組織的に行う学生運動が盛んに行われていた。その雰囲気に乗った高校生たちが生徒会を中心に、自由を求め服装自由化運動や制服廃止運動を行っていた。これらの制服廃止運動で「制服は生徒管理の象徴」というスローガンが掲げられ、制服は戦前の軍隊や封建制的な日本社会を思わせるものであり個性や人権にそぐうために廃止されるべきであるという意見が挙げられていた。

また、この頃の高校生の活動について、2022年にNHK長野放送局の斉藤光峻さんが書いたWEB記事。この記事は、視聴者から寄せられた「何故長野県は私服で登校する学校が多いのか」という疑問を解決するための記事であり、制服を廃止するに至った経緯が書かれていた。記事の中で取材を受けていた、当時高校三年生だった桃林聖一さんによると、「高校生はこうであるべきだ」と押しつけられるような雰囲気が当時あった中で、高校生は「自分たちのことは自分たちで決めたい」と思い、自由や自治を求めているいろいろなことに参加・発言していく時代の風潮があったそうだ。また、当時盛んに行われていた学生運動に参加する高校生もおり、その影響が長野高校にも及んだ。一部の「制服は生徒管理の象徴」だと考えた生徒たちが服装の自由を求めて校長室で校長や教員を取り囲み自分たちの主張や不満を訴え、制服自由化を実現させた。そしてこの流れが県内の別の高校にも広がっていったという。

しかし、制服についての議論は2000年代に入ってから続いたようだ。2007年と2014年に2度統合した県立飯山高校もその一つであった。制服がない飯山照丘高校と制服がある飯山南高校が統合した際、「学校に誇りを持ってもらいたい」などの理由から制服が採用された。しかしその後の、飯山北高校との統合では制服をめぐって意見が割れることになった。この記事に、高校が統合された当時、飯山北高校の校長だった渡辺藤夫さんへのインタビューが掲載されていた。渡辺さんは、「制服を作るか作らないかの意見は教員から募ったが、制服のある学校を多く経験していた先生たちは『制服をしっかりと着てルールを守る。そういう力を付けた方がいい』という意見であったのに対して、制服がない学校を多く経験していた先生たちからは『制服について注意や指導をする必要もないので生徒とフランクに交流できる』などの声が多かった」と話しており、約3年の協議を重ねた結果、飯山高校は制服を廃止した。「新しい学校の教育目標には『みずから考え探求する力をつける』、『自主自立の精神を養う』という項目がありました。そういう意味では決められた制服ではなく自由な服の方があっていいと考えました。多様な生徒の個性を尊重する教育をしていきたいということでした。」と渡辺さんは語っている。

以上のことから私がたどり着いた答えは、1970年代前後の制服廃止運動があった頃から生徒の意見や自主性を尊重しているために、長野県の県立高校では制服がない高校が多いということだ。

4. 結論

私は、私服で登校することができれば全ての生徒がストレスのない学校生活を送ることができると考え、探究を行なった。その中で、1970年代の学生運動による影響で制服自由化運動が行われ、それによって学生制服の私服化が行われたことを知った。特に長野県では、制服自由化運動から何十年経っている今でも私服で登校するという校則は変わっておらず、その数は長野県にある県立高校の50%にもものぼる。これは、生徒の自主性や個性を尊重しているからだとわかった。また、私はこの探究活動を行なっている中で、制服自由化運動が行われた当時の高校生は自分たちの意見を持ち、自分たちの力で学校を作り上げるという熱意や強い決心、それに伴った行動力を持っていると感じ、今の高校生の雰囲気とは全く違う印象を受けた。

5. おわりに

私はこの論文で、自身の経験をもとに学生制服の在り方について研究してきた。この探究を行う前は、制服と私服を選択制にすれば健康面やジェンダー、衛生面での制服問題は解決すると思っていた。しかし、制服を無くした時のデメリットが沢山あることや制服が志望校選びの決め手になることを知り、簡単に制服を廃止することは出来ないと思った。一方の意見を反映しようとするれば、もう一方の意見を蔑ろにしてしまうことになる。両者の意見を反映し、それを実現させるためには多くの時間が必要になる。私は今後、自分と同じ悩みを持つ人が快適に学校生活を送れるようにするために、自身が研究してきたことを広めていきたいと思う。また、制服の姿形を残しつつ、全ての人が快適に着ることが出来、今の時代に合っている制服の姿を日々考えていきたいと思う。この論文を読んだ方には、健康面から見た制服問題についての知識を覚えておいてほしい。また、「どうすれば全ての人が納得する制服を作ることができるか」という問いについても考えてみてほしいと思う。

6. 参考文献・出典

小林哲夫(2020)『制服とは何か』朝日新書

孫 珠熙(2014)『テキストマイニングによる高校制服着用時の感情の可視化』一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集 66 (0), 94-

斉藤光峻(2022)『制服なぜないの?』NHK長野放送WEB特集記事